

〔注釈〕

岡上の暮らしと社会の諸相

——岡上在住・宮野薫さんの文章

小関和弘・堂前雅史

——要旨

川崎市麻生区岡上在住の篤農家・宮野薫さんがお書きになった、かつての岡上の生活や社会的動向、農業に関する伝承等などに関する文章に小関と堂前が注釈を付け、「地域流域社会論」「地域流域政策論」などの〈流域プログラム〉関連授業受講学生や岡上や地域に関心を持つ方々が比較的容易に読むことができるようにしたもの。

〔注釈〕のはじめに

——宮野薫さんの文章を紀要に載せることについて

小関和弘

大学開放講座として「岡上を読む」を二回開催（一九九九年度・二〇〇〇年度）して以降、いろいろな形で岡上の方々にお付き合ひ

させて頂くようになった。宮野薫さんはその講師としてお話をお願いして以来のご縁である。

また、縁あって現代人間学部の堂前雅史さんの授業「地域流域社会論」「同 政策論」に共担として加わらせて頂くこともなった。

薫さんにはその「社会論」の授業にご来校頂き、学生たちに「かつての岡上の暮らしと農業」という講義をして頂いた。もう十年以上続いている。コロナ禍のもとの今年度はZoomを使って薫さんのお宅から実況中継をした。岡上で唯一の大工さんとなった——かつては三人の大工さんが居られたそうだが——鳥海輝治さんにも、薫さんと同様に毎年講師をお願いし、お話を聞かせて頂いたり、お宅に伺っていろいろな大工道具を見せて頂いた。

そうしたなかで、薫さんからは折々にワープロで書いた岡上に関する文章（清書はピアノの先生をしてもらえるお嬢さんがなさったらしく、ピアノの五線譜の裏紙が使われていることもあった）を頂戴した。

その中味は上に書いた「講義」と重なる部分も少しはあったが、初めて知る事も多く、それらの文章を大切に保存してきていた。

*

私事だが、私は今年度で和光大学を定年で退職する。薫さんから頂いたこの文章をわが筐底に埋もれさせてしまうのはとてももったいなく思われてならず、エイヤツとばかり薫さんにお許しを頂いて、学部紀要に「注釈」つきで掲載させて頂くことにした。

本文よりも注釈の方が文字量が多くなったが、「社会論」「政策論」などの授業をこれから受ける学生の皆さんの参考資料になったらとの思い——そして、後述するもう一つの思い——から、詳しくすぎるくらいの注を付けた。岡上に関する薫さんのお話への注に、他の麻生や岡上に関係する書籍や文献を引いたのも、学生さんをはじめ、この文章を読んで下さる方々が岡上や麻生への興味を拡げて下さったらと思うゆえンである（煩わしさを増やすだけになってしまったかも知れないが）。

*

本文を読んで頂けば分かるが、薫さんは一九二九（昭和四）年のお生まれで、今年（二〇二二年）一二月に九三歳になられる。いまでも朝から一人で畑に出て仕事をなさっている。実に博覧強記の方であり、筆力にも頭が下がるばかりである。事々しく薫さんのこれまでの肩書きを書くに薫さんを困惑させてしまうかも知れないが、岡上町内会副会長、岡上神社総代代表、岡上山東光院宝積寺檀家総代、柿生禅寺丸柿保存会初代会長、岡上郷土誌会会長、川崎市農業委員などなど、地域の要職を歴任してこられた方である。元禄時代から

続く旧家の十二代目のご当主で、和光大学にとっては、立地する土地の旧地主さんの一人であり、大学創立四十周年を記念して復活した「どんど焼き」を行う「和光坂下」の田圃のオーナーさんでもある。薫さんの理解なくしては和光大学はそもそもこの地にこのように立ってはいなかった。

地域の財産とも言える宮野さんの文章を比較的目的に触れやすい形で公開しておく理由は上に書いたとおりだが、これが和光大の先輩教員・故鈴木勁介さんの『私編 岡上風土記稿』（八月書館、二〇〇三年）のお仕事を追慕するささやかな一片でもあれたらと不遜ながら思っている。

*

もともと日本文学研究者の私が岡上に深入り（？）したのは、岡上の方々から大変よくして頂いたからということがある。自分の住まう団地のご近所さんよりも岡上の方々が顔とお名前が一致するし、その方々がどのようなお仕事をなさってきたかも割に存じ上げているつもりでいる。だから、岡上町内会、岡上西町会、両方の納涼祭（盆踊り）に行っても、席に呼んで一緒にお酒を飲んで下さる方が複数おられる。

個人個人のお名前を挙げることは控えるが、そうした岡上と岡上にお住まいの方々への思いと併せて、岡上のことを考える私の頭のなかにはゴーギャンの画題「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」がふわふわと浮かんではいるのである。

縁あって和光大学に職を得、三十数年勤めさせて頂いた。そのあいだ、ずいぶん我が儘に仕事をしてきたと思う。そうしたなかで、

自分の生にとって和光大学は、岡上は、通過点に過ぎないのだろうかという思いがしばしば頭をよぎる。産土の地ではない場所（^{プレイス}空間）で私はどう生きるのだろうかとの問いと言い換えてもよい。職を得るといえるのは、そこをメシの種を得る場所と割り切る事なのかも知れない。しかしそれでは心のザワつきが収まらない。

*

現代人間学部の学部長職に就いて今まで以上に忙しい日々を送っておられる堂前さんに、私は薫さんの文章の生物関連の箇所へ注釈を付けて下さるよう、ご迷惑を省みずお願いをし、ご快諾頂いた。注釈にいちいち堂前さんのフルネームを書き込まなかったが〈堂〉印の付いている箇所は堂前さんの筆による（同じ語に対して堂前、小関の両名が注釈を施した場合に限り、小関の執筆部分を明示するために〈小〉印を付した）。さらに魚名に関する箇所については、教養子の形山浩子さんの論文を紹介する形でコメントをして下さった。簡略ながら、ここに記してコメントへの謝意を表したいと思う。また、「社会論」「政策論」で一緒にすることを経験したことが、まへ心からのお礼を申し上げたい。

なお、宮野薫さんがお書きになった本文の元号表記はそのままとしたことをお断りしておく。

他の冊子にお寄せ頂いた文章の元号表記を、他の筆者の文章との整合をとるため、西洋表記への変更をお願いしたことがある。その際、薫さんは「西暦だとなんだかよく分からないんだよね」とおっしゃっていたが、そこを枉げてお願いし、ご諒承を頂いた。その

ことを一方に意識しながら、今回は原表記のままとしたのである。

宮野薫さんの文章

小田急線にまつわる話

近所の海老沢義章さん（大正五年生まれ）から聞いた話だが、海老沢さんが小学校から帰ると友だちと川井田谷戸^{（1）}へ行きトロッコへ乗せてもらって遊ぶのが楽しかったそうだった。大正の終わり頃、小田急の建設工事で、境塚^{（2）}の下をくり抜くトンネルを掘って出た土を川井田谷戸の一部を埋めて鶴川駅^{（3）}の方向へ運ぶのにトロッコを使ったのである。今思えば嘘のような本当の話である^{（4）}。

昭和一二年、日中戦争が勃発するや、柿生からも多くの若者が召集されて歓呼の声に包まれ郷土を後にした。車窓から身を乗り出した日の丸の旗を打ち振り乍ら電車は遠ざかって行く。小学生だった私たちには征く人、それを見送る家族の心情など分かる筈もなくホームに立ちただ万歳万歳で送ったものである。

やがて終戦となり今度は食糧の買出しで車内は大へんな混みようであった。大きな荷物を持って窓から出入りする人、ドアの所は人が鈴成り、連結器の上まで人が乗っているのを見かけたものである。私が子供の頃（昭和一〇年代初期）、神田に叔母、京橋に叔父が住んでいたの祖父に連れられよく東京に行った。岡上なので鶴川駅から乗るのだが、屋根も無い短いホームで乗る人は一〇人位で三〇分



木箱に詰められた禅寺丸柿
(麻生観光協会 HP による)

めなければならぬので大変であった。今にして思えばよく事故が無かったものだと思う。

多摩川を過ぎ新宿に近づいても経堂辺り迄は、駅周辺以外は一面畑が広がっていて、茅葺き屋根の農家も点在していた。当時はまだ柿生、岡上方面では養蚕をやっていたので桑畑があちこちにあったが、世田谷方面では胡瓜、茄子、トマトといった果菜類が広い畑一杯に栽培されているのに驚いた。新宿に着き中央線に乗り換えるのだが、山手線も中央線も自動ドアなので驚いたりまた安心したりしたものである。

また小田急線周辺で暮らす者にとっては電車は時刻を知らせる大きな役割もしてくれた。上りの一番電車は大体朝の五時。これは今でもあまり変りはないようである。そして今はないが昔は一日に何本か砂利列車⁽⁵⁾といって相模川から採取した砂利を東京方面へ運ぶ貨車が運行して居り、丁度午前一一時になると一本通るので時間が分り、それからしばらく仕事をしてお昼に家に帰ったものである。

に一本位の間隔。しばらく待つて電車が

来てもドアは自動ではないので自分で開けなければならず、最後の人も自分で閉

秋になると禅寺丸柿の成り番⁽⁶⁾の年には親戚や知人に送るため木箱に詰めた柿を駅に持って行くと、外にも中にも一杯あった事など遠い日の思い出である。

手巻きの柱時計⁽⁸⁾を巻くのを忘れて止まった時など父親から「薫、踏切の所へ行つて電車が丸か四角か見て来い」とよく云われたものだ。電車の前方と後方に付いている行先表示板が丸いのが江の島行き、四角のは小田原行きであったのだ⁽⁹⁾。それぞれ一時間に一本くらいだったのでラジオの無い時代は電車は人や物を運ぶ以外時刻を知らせる大きな役割を果たしていて線路の近くに住む人は助かったものである。

世の中も落ち着き昭和も三〇年代に入るとそれまで鉄色一色だった小田急線に赤を基調にした明るい色のロマンスカー⁽¹⁰⁾が登場し、駅が近づく⁽¹¹⁾と心地良いホーンを鳴らしながら走るようになった。

ホーンが聞こえると子供たちは走ってロマンスカーを見に行ったりした。今はあの懐かしい音を耳にすることはなくなってしまった。車輛も本数も駅舎もホームも駅名も周辺の景色から何から何まで変ったなかで、柿生、鶴川は開業当時の駅名のまま思い出と共に健在である。

なお、記録によると小田急線の着工は一九二五年一月一〇日に上野の精養軒で起工式が行われ一年五ヶ月後の、一九二七年四月一日に新宿小田原間が開通した⁽¹²⁾ということは、今では考えられない早さである。遅れて開通した江ノ島線は、相模大野から江ノ島まで一年で完成したという事は、これもまた驚きの他はない。機械のあまり無かった時代に、どういう方法で成し遂げたのか、知りたいもの

である。⁽¹³⁾

昭和三〇年頃の新宿までの小田急沿線風景

鶴川駅を出て新宿方面へは主に左側は水田が多かった。駅の周りには住宅が多く見受けられた。間は農家が点在していた。多摩川を過ぎると水田は無くなり、畑が多かった。経堂辺りまでは農家が見受けられ、野菜の栽培技術が進んでいるのが見て取れた。

終戦直後の新宿駅の周辺

東口を出ると尾津組（テキ屋）⁽¹⁴⁾のマーケットがあり、通りには露店が並んでいて、戦時中、店先から消えていた商品が一杯並んでいたのに驚いた。焼け野原のような中に、伊勢丹と三越が立っていたが、伊勢丹は進駐軍に接収されて居り、ウインドウにきらびやかな商品が陳列してあったが、日本人は眺めるだけで這入ることは出来なかった。

映画館の復興は早かった。武蔵野館、帝都座、第一劇場、新宿東宝等々。東宝劇場で宝塚歌劇団と上原謙の実演を観た。帝都座では洋画と、五階では額縁ショー⁽¹⁵⁾をやっていて、第一劇場では美空ひばりの映画と岡晴夫の実演があり大変な人気だった。

ある日、友人と武蔵野館で映画を観て、露店のおでん屋で食べているとき、一緒に食べていた小学生位の男の子が食い逃げしたのに驚いたが、食べ終わりに勘定しようとしたら腰のポケットに入れてお

いた財布が無い。友人が払ってくれたので良かったが、とんだ災難だった。

二丁目周辺を友人と歩いていた時、偶然鶴川のKと逢った。「珍しいところで逢ったな」と声を掛けたら「俺は此所で用心棒してるんだ」と澄まして答えたが、彼は軍人の息子で山水中学⁽¹⁶⁾を出て、不良っぽい所があったので「やっぱりなあ」と妙に納得したものである。

また或る日、武蔵野館で映画を観て出ると、真福寺の同級生の森君とばったり逢ったので「映画観たの」と聞いたら「いや俺は此所の上でダンスを教えるんだよ」と笑い顔で云った彼も、もうこの世に居ない。

新宿駅東口を出た所に聚楽⁽¹⁷⁾と云うビルがあり、その何階だったかは忘れたが、そのフロア全部が軽飲食の客席で、一角にステージがあり、ギターとアコーディオン位のバンドで、とても歌のうまい若い歌手が歌っていたのを何度か聴いたことがある。近くのムーラ⁽¹⁸⁾ンルージュという劇場の専属歌手だった若き日の春日八郎だったようである。当時能ヶ谷の水野さんがムーラン劇場に出ていて、後年大歌手となった春日八郎がテレビで、水野さんには大変世話になった話をした、と人伝に聞いた。その水野さんが岡上青年会でやった素人芝居の演技指導してくれた事がある。六〇年以上も昔のことである。

その頃、屋台で鯨のテキと云って鉄板に小さく切った鯨の肉をのせて焼いて皿に盛りつけ、値段は覚えてないが旨くてよく食べたものである。当時、豚や牛など高級でとても口に這入らなかったが、

今ではまったく逆になってしまった。前後に看板を掛けて歩くサン
ドイッチマンをよく見かけたのである。

今は殆ど無くなってしまったが、道端に少年の靴磨きが一杯居た。
今思うと皆家を出る時、靴は磨いて出たであろうに、どうしてあんな
に出先で磨かせたのだろうか、不思議な気がしてならない。

ある時、三越前を歩いて居たら、道端で店を張って居た靴の修理
屋に呼び止められて強引に靴を脱がされ、半張りをさせられたこと
があった。今は無いがあの頃は、革靴の寿命を持たせるため、半張
りをするのが、珍しくは無かったのである。その年の麻生の不動様
に行ったら、その暴力靴屋が仲間らしい人と来て居たのを見掛けた
が、商売で来たのかは定かで無かった。こんなに不動様は有名なの
かと、改めて感心したものである。

岡上のあれこれ

河川（鶴見川）——昭和三〇年代迄は、兩岸には真竹が群生し
ており、川幅も狭く曲りもあったが、五〇年代に入って治水工事が
されて景観は一変した。以後洪水の被害はなくなった。

昔は蚕道具や野菜等も川で洗い、魚を獲ったり水浴びをしたり、
道普請の時など道路に敷く砂利を川から掬って使ったものである。
或いは日照り続きで困ったときの雨乞いの行事、精米、精麦を商い
とした水車等、川は暮しと深いかかわりを持っていた。

山林の形態——岡上は丘陵地帯なので松や杉、サワラ等の針葉

樹と、クヌギ、ナラ、ミズキ、ハンノキ、カシ等の闊葉樹が多かつ
た。現在では、松や杉の太木を目にすることはなく、代りに竹がは
びこり、それによる弊害が起きている。

水田は谷戸に沿って続いており、昭和三〇年代暗渠排水の工事が
行われる前は殆ど湿田で、作業するときは皆裸足になってした。田
起し、代かき、田植え、草取り、稲刈り迄は全部手作業で、脱穀は
足踏式脱穀機で、「野ごき」といって田圃でこいだものだ。こいだ粃
は吠（カマス）で家に運び、フルイでふるってから唐箕（トウミ）
にかけてムシロでよく乾かしてから唐臼（カラウス）で玄米にした
ので、大変な労作業であった。

畑はまとまった場所といえは川内で、次は川井田下地区くらいで、
昭和二〇年代頃は水道部を除いて一軒も家は無かった。販売目的で
野菜を作るようになったのは、戦後のことで戦前は桑畑が多かった。
丸山を始めとするいわゆる「原地」には、麦、陸稲、さつまいも等
が多く見受けられた（※水道部昭和一八年より一九年迄、川崎市水
道部の事務所 官舎があった）Ⅱ宮野さんの原注。

主として櫓が立っていた屋敷林も今ではあまり見られなくなった。
しかしながらかつて農家の暮らしを支えてくれた禅寺丸柿は、戦前
は二〇〇〇本を数えていたものだが、現在は七〇〇本弱となり減少
は止むを得ないが、春には新緑、秋には赤い実をつけ、紅葉し、見
る人の心を和ませてくれる。故郷の誇り得る景観の一つではなから
うか。

昔、目にした動植物——今は、川では鯉と鴨の姿はいくらでも

見られるが昔は目にはすることはなかった。

辺りにウナギ、ナマズ、ゲバチ⁽³⁴⁾、フナ、ウグイ(ハヤ)、ドジッポ⁽³⁵⁾、イタブナ⁽³⁶⁾、キンブナ⁽³⁷⁾、モクスガニ、小エビ、ヤツメウナギ⁽³⁸⁾等が棲息していた。鯉は堰上の水の深いところにいて、めつたにその姿を見ることがなかった。

特に畦寄せのすんだ田んぼにはドジョウが多くいて、夜カンテラの灯りでドジョウ打ち⁽³⁹⁾をして楽しんだものである。

ヒルやウジムシ(アブの幼虫)、イモリ、メダカ、オバク⁽⁴⁰⁾等いくらもいたが、最近のカエルの鳴声も聴かなくなった。ヒキガエルも姿を見せなくなった。

その他、特徴のある斑紋を持った毒蛇のマムシを始め、シマヘビ、ヤマカガシ、ジムグリ。ほとんど見ることがなくなったが、アオダイショウだけは時々出てくる。

山野に自生していたものでは、ツツジ、山百合、オミナエシ、キキョウ、リンドウ、ナデシコ、カルカヤ、ジジババ⁽⁴¹⁾、センブリ、川沿い等には、カガエビという食べられる野生のブドウがあった。アケビは今でも目にするところがある。

昔のくらし

衣——昭和一五年頃迄小学生は着物が多かった。大人も着物がほとんどだった。男性の正装は紋付きに羽織袴を着用した。大正時代の村人の集合写真を見ると洋服姿は村長と教員と巡査くらいである。戦争が激しくなるにつれ、男性は服を着る様になりカーキ色の

国民服が普及した。女性はモンペ姿に変わった。

食——普通の食事は麦飯で米と麦の比率は家によって相違あり。一汁一菜で、魚類はたまに食べるくらいで肉や刺身などは、一年に一度口にするかしないかであった。親戚や組合うちで葬式や結婚式があると、引出物として出される饅頭や口取り(鯛や刺身やきんとん等の這入った折詰)を口にするのが楽しみであった。来客の際、お茶菓子の無い時には白砂糖⁽⁴²⁾を出したものである。

住——昔の農家は皆、草葺きの屋根だった。家の立替えが始まったのは昭和三〇年代に這入ってからである。食事と寝るための母屋と、物を仕舞ったり作業する物置と、堆肥や肥料を入れておく下屋や薪やくず(落葉)や結束した枝を仕舞う木子屋があった。米や大事な物を仕舞っておく土蔵がある家は多くなかった。母屋でもガラス戸が付いているのは入口だけで、他は障子、板戸、襖だった。物置には板戸があったが、他は戸は無かった。母屋の入口を這入った所は土間で、農作業や餅搗き等をした。

本当にあった話——戦前・戦中・戦後の私の体験記⁽⁴³⁾

不思議な現象二題——

〈狐の提燈〉

私が小学六年の時、補習授業を受けて学校の帰りが暗くなってしまう。昭和一六年の頃の話である。岡上橋⁽⁴⁴⁾の所で、ふと学校の方を振り向くと、山の中腹に提灯が一〇コくらい並んでいたのを、七

十六年経った今でもはつきり覚えている。後年、小島一也⁽⁴⁵⁾さんが柿生郷土資料館の会報の中で、秋葉山⁽⁴⁶⁾の狐の提灯について記されて居るのを見て、やはり狐の提灯はあったのだと確信を強めたものである。

〈夕立後の異変〉

今ではあまり見られなくなつたが、晴れた夏の日急に空が暗くなり、夕立に襲われたものである。夕立が去つたあと庭に親指ほどもある、どじょうが跳ねているのをよく目にした。或る時、多摩川近くの久地の人にその話をしたら、彼も昔畑の砂利を取つた穴の水溜まりの中に魚が何匹か泳いでいた。これも不思議なことだと云つて、お互いに不思議さを競い合う様な事があつた。あれは何だつたのか今だにその謎は解けない。⁽⁴⁸⁾

農家と桐の木——昔は女の子が生まれると、庭に桐の木を植えた。成人して嫁ぐ頃にその木で筆筒を造り、持たせたものだ⁽⁴⁹⁾と聞いた覚えがある。隣村の大蔵には桐の木を専門に買う業者が居た。

卯の日と苗代の種蒔き——子供の頃、卯年は良くないと聞いた覚えがあるが、天明の大飢饉が卯年であつた⁽⁵⁰⁾とか。卯の日に種蒔きはなるべく避けたものである。⁽⁵¹⁾

耕地畑には果樹は植えない——平垣の良い畑には。隣接地の迷惑にならぬよう、栗や柿の様な永年作物は植えなかつた。同じ地域共同体の中で生きていく者にとっては、他人に迷惑をかけてはいけ

ないという不文律があつた。

谷戸田のあな刈り⁽⁵²⁾（田の隣接地）には木は生やさない——田圃に隣接している山林は、田に面している場所一〇メートルくらいは、収穫に影響するので木を生やさなかつた。但し、草は隣接地の耕作者が刈つた。

道路に伸びた枝は道普請⁽⁵³⁾の時に切る——春と秋の彼岸の入りの日には、道路の補修の他、道に伸びている木の枝は切つてもかまわないことになつて⁽⁵⁴⁾いた。

消防は一戸一人、出動の時は隣家に声をかける——昔、火災の時は必ず隣家に声をかけて出動するという決まりがあつた。⁽⁵⁵⁾火事の時、出動しなかつた場合、理由によっては後で糾弾された。

兵隊送り、神社に参拝、駅頭での別れ——昭和一二年に始まつた日中戦争で、岡上からも多くの若者が戦地に出て行つた。社頭で武運長久を祈り、送る側、出て行く人それぞれの挨拶が済むと、幟旗を先頭に柿生駅まで軍歌を歌いながら送つたものである。ただ敗色濃い一九年、二〇年頃に出て行く人、それを送る家族の心情は如何ばかりであつたろうか察するに余りある。

戦利品の展覧会——今から八〇年くらい前、私が小学三年生の頃、父親に連れられて東京であつた日中戦争（当時「支那事変」と

云った)の戦利品の展覧会⁽⁵⁶⁾を観に行つた事を覚えて居る。場所は広い野外だったので、皇居前広場ではなかったかと思う。小銃、機関銃、大砲、戦車などたくさん陳列しており、大勢の人に混じつて見物した記憶がある。父(昭和五三年没)が健在の時に詳しく聴いておけば良かったと残念に思う。

ノモンハン事変に出動した兵士の話——事変に出動した人から。現地に着いたら前線から兵隊が丸腰で帰つて来た光景に接して。これは負け戦だと思つたという話を聞いた。

釜山に於ける出征軍人への婦人会の歓迎——叔父から聞いた話だが、叔父が昭和一六年六月、召集されて下関から船で釜山に着いたら、現地婦人会の人達の大歓迎を受けたという話であつた。

中国兵捕虜とのスナップ写真——中国から帰還した近所の人にを見せて貰つた写真の中に、数人の捕虜と一緒に、皆、笑顔で写つている写真を見て不思議に思ひ聞いたところ、「暇な時は野球をしたりしていたものだ。」と話したので、虐待のことを聞いたら、こちらの命令に従つていれば、そんなひどいことはしなかったという話を聞いた。

小学校に於ける青年団(青年学校)の軍事教練——小学生の頃、校舎の廊下の脇に訓練用の銃が並んで居て、時々青年学校の人達が校庭軍事教練をしていたのを何度も見た。

中学校に於ける配属将校による軍事教練——県立の農蚕学校⁽⁵⁸⁾に入学したら、週に一度配属将校による軍事教練があり(木銃)、武器庫には三八式歩兵銃、帯剣。軽機関銃等が収納されていた。四、五年生が使用したものだ。

黒く塗られた川崎市役所——昭和一九年頃だつたと思う。当時の川崎市街にはそれ程大きな建物は無く、唯一市役所は白く大きな存在だつたので、空襲を避ける為だつたと思うが、全体が黒く塗られていたのを覚えている。その頃、何で川崎に行つたか記憶に無いが、帰りに川崎駅のホームで、白人の捕虜らしき人が数名、上半身



戦災後(1945年)の川崎市役所時計塔。迷彩塗装が施されている。
[『目で見える川崎市の100年』郷土出版社、1993年より]

裸で働いていたのを、はつきり覚えている。

我が家に宿泊した測量の兵士たち⁽⁶⁰⁾——昭和二〇年六月、米軍の上陸⁽⁶¹⁾に備え陣地構築の為の測量だったのか、家に三人の兵士が泊まったことがあった。夕食が済むと部屋の中で、疎開していた従妹も交えて車座になり、よく歌を歌ったものである。兵隊だから歌うのは軍歌とばかり思っていたら、あに図らんや歌うのは流行歌ばかり、^〆燦めく星座^〆、あるいは^〆新雪^〆とか灰田勝彦の歌が多かった。お陰でこちらも歌を覚えて楽しい一時を過ごしたことがあった。

空襲⁽⁶³⁾…不発焼夷弾⁽⁶⁴⁾の処理——二〇年五月二五日夜の空襲は大変だった。いつもの様に下の畑へ出て見たら、東京方面の空は真っ赤に染まっていた。B 29の編隊が通り過ぎ、終わるかと思ったら、遅れてきた一機が焼夷弾を落とし、大正橋⁽⁶⁵⁾近くの家は全焼した。我が家では、軒先にあったリヤカーが直撃を受けて焼かれたが家は無事だった⁽⁶⁶⁾。隣の家では屋根裏に不発の焼夷弾が一発落ちていたと聞いた。草屋根のため衝撃が柔らかく発火しなかったのだろうが、発火していたら一溜まりもなかったと思う。近くの小学高等科のT君は、不発の焼夷弾二本を縄でしばって、皆に見せようと学校に持って行って先生に、「そんな危ない物を持って来るんじゃない。」と大変叱られたと聞いた。上の家のMさんは、不発焼夷弾が見つかる、近くの鉄橋の上から落として処理したと話していたが、今思うと嘘の様な本当の話である⁽⁶⁷⁾。



焼夷弾の燃えかす（手は薫さん）。

終戦八月一五日の事——前日から、明日正午にラジオで重大な放送があるということは知らされていた⁽⁶⁸⁾ので、当日正午、家族で聴いたが、内容がよく理解できず、ただ「耐へ難きを耐へ忍び難きを忍び」という一節が胸に響いたので、なお頑張れということかと思いい、近所のT君の所へ行ったら、国士風の人が居て、「おい。日本は負けたぞ」と大きな声で云ったので、初めて負けたのだと知った。間もなくして零戦が低空で狂った様に飛び交っていたのを覚えていゐる。翌日、いつもの様に動員先へ向かう途中、稲田登戸（現向ヶ丘遊園）の駅で降りると、厚木航空隊の兵士が三人で、「日本は負けなゝい。徹底して戦うぞ」と氣勢を上げビラを配っていた。あのビラを

取って置けば良かったものだとして思う次第である。

ホームを過ぎて止まる電車——昭和二〇年代中頃、鶴川駅のホームで電車の到着を待つて、やがて来たと思ったら、数一〇メートルから時には一〇〇メートルくらい通り過ぎて止まり、ゆっくり戻ってホームに停車する事が度々あった。待つて居る客は皆「ア、また行き過ぎちゃったナ」と云ったり思ったり、それが当たり前の如く、誰も文句を云う人もなく何事も無かったかの様に、停まった電車のドアを自分で開けて乗り込んだものだった。今だったら大きなニュースになる様な事だが。昔はおおらかな面もあったものである。

御神火と大島旅行——昭和二五年か二六年頃、三原山が噴火して、溶岩が流れ出したことがあった。今では考えられない事だが、当時はそれが観光の目玉で、多くの観光客が大島目ざして出掛けたものである。私達地元のグループもその例に洩れず、大島旅行に出掛けたものだ。夜の一時、東海汽船の橘丸に乗り、竹芝桟橋を出港の時、船上の人と見送る人達が互いにテープを交わし、ドラの音と「螢の光」のメロディーが流れる中、船は桟橋を離れた。やがて観音崎の沖合で停船し乗客は休むものだが、その時、闇の中に遙か大島の三原山の頂から、真っ赤な帯の様になって、溶岩が流れ落ちている様子が見てとれ、あゝ明日はあれを近くで見られるんだと、皆一様に心弾ませたものだった。今でもあの光景は私の脳裏に焼きついて離れない。

翌日、元村（現元町）の桟橋に着くと、大勢のアン娘始め、地元

の人達の歓迎を受けて船を下りたものである。そして三原山の山頂めざして、行列に加わって登り始めた私達は、御神火茶屋で一休みし、溶岩めざして歩き出した。やがて溶岩の目前約一〇〇メートルくらいか、音も立てず静かに流れ落ちて行く様を目の当たりにして、感動を覚えたものである。そのうち、何かゴムの臭いがしてきたと思ったら、靴底が熱くなり、見たら靴のゴム底が溶け出したので、慌ててその場を退散した。

その後、昭和六一年の三原山の噴火の際は、安全第一ということで、全島民一人残らず避難ということになったが、今昔の感一入の思いである。

「注釈」の終わりに

——宮野薫さんの証言の意義

堂前雅史

宮野薫さんにご出講いただいた「地域流域社会論」は、二〇〇八年に文部科学省が大学教育支援のために設定した制度「質の高い大学教育推進プログラム（教育GPE）」として、本学の「流域主義による環境教育と地域貢献」が採択されたことに伴い、中心となる科目として設定したものである。「地域社会論の研究者が自分の研究フィールドを講義するものではなく、大学のフェンスのすぐ向こう側の地続きの生きた地域社会を学生が実践的に学ぶ科目」と教育GPE審査のヒアリングでは銘打った（その当時にはこうした発想は日本の大学には少なかったのではないかと思う）。そう言いきったものの、生

きた地域社会を語ることは、よそから通勤している我々教員には限界があるので、地域の生き字引のような方の存在を前提としていた。もちろんそれは宮野薫さんであった。薫さんの博學で生き活きた証言は多くの学生を刺激し、岡上の社会や自然の中へと学生を誘った。まさに「フェンスのすぐ向こう」の世界を自分たちの知的探求、実践活動の舞台として捉え直す眼差しと姿勢が学生たちに実装されたと思っている。

薫さんの証言は地域の生態史として重要な情報に富んでいる。例えば鶴見川の魚類については、60年以上前の都市化される前の鶴見川の魚類史が分かる。薫さんがあげた川魚のリストを見ると、タナゴを除くと、現在も鶴見川のどこかで見られる。今や希少種になったカワヤツメやギバチも含めれば、意外と鶴見川の魚はどこかで生きていることが分かり、都市河川である鶴見川の生物相の豊かさに驚かされる。

さらに「鯉は堰上の水の深いところにいて、めったにその姿を見ることがなかった」という証言は注目すべきものである。近年、日本に生息するコイはミトコンドリアDNAの塩基配列で明瞭に異なる二タイプが存在することが明らかにされた⁽¹⁾。一方は中国から人為的に飼育用に移入されたものが野生化したと考えられる導入型で、ほとんどのコイがこれに該当する。一方は日本の在来型のコイであり、今日では琵琶湖など一部の水域を除いてほとんど見られなくなってしまった。在来型のコイは体型も若干異なるが、生息場所も深い場所に住み、めったに人に姿を見せないらしい。現在のように人を恐れないコイは、導入型のコイが逃げ出したり、放流されたりし

たものの子孫と考えられる。薫さんの右の証言は、当時の鶴見川には、現在の日本では希少種となった、在来型のコイが当時の岡上に住んでいたことの傍証になり得るのではないかと思っている。

まだ我々が不勉強なために気付いていない重要な情報が含まれていると思われる、こうした証言を残す意義は大きい。

〔注釈〕

(1) 岡上にある三つの谷戸——武蔵や相模で谷間や湿地を指して言う語の一つ。鶴見川から和光大へ向かうときに通るのが「川井田谷戸」。和光大から尾根道を隔てて東側に「山伏谷戸」と「天神谷戸」(二つ合わせて単に「谷戸」とも)、さらにその東に「池ノ谷戸」がある。その東、岡上の東端には「新田谷戸」があるが、谷戸の姿をほとんど残していない。

(2) 芥川龍之介(一八九二—一九二七)の短編『トロッコ』は一九二三年三月に雑誌に発表された。小田原・熱海間の軽便鉄道敷設工事現場のトロッコに乘せて貰った子どもの不安体験を核とする話。距離はまったく異なる(短い)が、鶴見川・岡上周辺に同じようなトロッコ体験をした子どもがいたという証言で興味深い。また、柿生郷土誌刊行会編『ふるさと』は語る——

柿生・岡上のあゆみ(一九八九年)によれば、柿生駅周辺の線路敷設に際しても湿田の埋立のためにトロッコによる土砂運搬が行われたとある。

「元氣のよい若者の声や、何台も続くトロッコの騒音で、今まで静かだった柿生は、ひっくり返るような騒ぎでした。」と誌されている(二〇七頁)。

(3) 小田急線で鶴川から玉川学園へ向かう途中にくぐるトンネルが「境塚隧道」(全長二・三・四メートル)。そのあたりの字名が「境塚」。岡上からみると集落の外れの「境」となっている。別の文章で薫さんは「鶴川方面から」玉川学園の方に向かうと、進むにつれて小高い地点が迫ってくる。玉川大学工学部のすぐ近くである。岡上の最南端でこの辺りを経塚と言う。事典に経塚とは平安時代仏教を後世に残すため経文を筒に収めて地中に埋め、塚を築いたところとある。この場所も地形から推しても正しくそうであったに違いない。」と記している(宮野薫「川井田谷戸の周囲とその変遷」、川崎市麻生区岡上西町会『町会創立五〇周年記念誌』(二〇一四年一

一月、二八頁。二〇二二年九月に薫さんからお話を伺った際も「経」と書くことに触れておられた。一方、小田急線のトンネル工事の際に「調べてみたが何も出てこなかったといわれている。」と町田市文化財保護審議会編『町田の民話と伝承第一集』（一九九七年）の「玉川学園の経塚・境塚」（九六頁）にはある。

- (4) 岡上郷土誌会『郷土岡上——郷土誌資料収集のまとめ』の「テーマ10・暮らしの変化」の「小田急線開通、その後の岡上」（二二〇頁）には「（一九二七年の）小田急線の開通以前は東京へ行くのに、岡上から徒歩―池谷戸―奈良―長津田―横浜線で東神奈川へ―東海道線で品川へと乗り継いで一日がかり。東京で一泊して帰りは岡上に帰宅して夜となる二日がかりだったそうです（故・横田貞雄さん談。」とある。小田急線開通が岡上にとつていかに大きな意味があったかが分かる。

- (5) 小田原急行電鉄（株）は一九三〇年一月一日から、相模厚木駅（現本厚木駅）―東北沢駅間で砂利輸送を開始した。東京市内の建設需要に対応するためである（渋沢社史データベース）中『小田急五十年史』（一九八〇年）による。

- (6) 年を隔てて果樹が豊凶を繰り返すことを「マスティング（Masting）」と呼ぶ。佐竹曉子「数理モデルを通してみる植物の環境応答力」（『化学と生物』五四巻三号、二〇一六）は花や種子量の豊凶を決める仕組みは未解明としつつ、「開花・結実に影響を及ぼす気象条件の年変動」という外的要因説と「植物体内の養分量という内的要因」説を掲げ、「私たちの生活に身近なミカンやカキ、アボカドなどの果樹においても、果実のなり年と不なり年が交互に現れる隔年結果が頻繁に見られる」と記している。

- (7) 池上本門寺のお会式などに出す場合には、柿を丸く円筒形にまとめた姿（「まるった」形）で出荷したが、遠方への輸送のため木箱の荷姿が一般化し、地域共通のラベルも作られた（写真参照）。

- (8) 文字盤に穴が二つあり、右穴が時計用、左穴が時計打ち用のゼンマイ巻き上げのためのもの。柱時計の筐体のなかにネジ巻きを収納する。八日に一度巻き上げる型が主流だったが、後に三〇日巻も登場した。

- (9) 『小田急五十年史』一一一頁頭注。
(10) 一九五七年六月に第一編成が完成し、七月六日から第二編成が営業運転に入

- った小田急3000形電車のこと。戦前からあったロマンスカーを一新し、SE（Super Express / Super Electric car）車とも呼ばれる。「新幹線のルート」や「超高速鉄道のパイオニア」ともされるとおり、さまざまな高速走行技術が盛り込まれた車輛であると同時に、それまで地味だった車輛のカラーリングをバリーミオンオレンジ（朱色）基調とするものに変更した。以後、この色調がロマンスカーに受け継がれている。この3000形式は一九九二年に全車廃車となるまで長く現役を務めた（生方良雄『日本の私鉄5 小田急』（保育社カラーブックス、一九八一年、一七頁、二〇一二年）／『鉄道ビクトリアル』五四六号（一九九一年七月、八二―八六頁）。高速運転の安全確保のために、電車接近をいち早く知らせる目的で、警笛とは別に補助警報器（ミュージックホーン）が付けられた。その音色に親しみを込めた「オルゴール電車」との呼称も生まれた（生方良雄『小田急ロマンスカー総覧』（大正出版、二〇〇五年、八七頁）。

- (12) 起工式当日の十一月一日に社長の鶴松利光は「大正十六年四月一日全線開通を表明」していたが、着工はそれに先んずる九月一日であった。それにしても早い完成であり、当時から「小田急の突貫工事」と囁かれていた。開通時は全線複線ではなく、およそ半年後の一月一日に複線での開通となった（参照：『小田急五十年史』一九八〇年、七八九頁。『有鄰』四七二号、二〇〇七年三月、生方良雄／老川慶喜他「座談会」新宿・小田原・江ノ島「小田急」開通八〇周年）。小田急関連の記述のため、薫さんは小田急へ問い合わせられて、雑談の折に「小田急は工区を六区に分けて工事したんだ」とも話して下さった。

- (13) 小田急線の工事に関連して薫さんは「建設の」当時からいて、「コーン、コーン」という根元に打ち込む口切りの音や、「ズシン」という巨木の倒れる音を聞いて、何とも言えない、やりきれなさに包まれたものである。ただ皮肉にも木陰がとれたため、冬の日差しが一時間以上も我が家を照らし、それを祖母などは喜んでる風だったことを覚えていて」と記しておられる（前掲『町田会創立五〇周年記念誌』「川井田谷戸の周囲とその変遷」二二九頁）。

- (14) 露天商の尾津喜之助（一八九八―一九七七）が戦後、関東尾津組の組長として新宿駅東口に開いた青空マーケット。尾津は七万人を擁する東京露天

商同業組合の理事長に就任したが、一九四七年恐喝容疑で検挙され組を解散。のち、六〇年安保では安保改定賛成派として政治団体を作り活動した（講談社『日本人名辞典』）。

- (15) 西洋名画を模して「名画アルバム」と題し、額縁の中に上半身裸の女性を立たせるスタイルで、一九四七年一月一日から始まった帝都座のショー「丸木砂土」の筆名で随筆も書いた東京宝塚劇場の社長・秦豊亨（一九二一—一九五〇）が企画・演出した。日本のストリップショーの始まりとされる（『日本国語大辞典』&『世界大百科事典』）。作家永井荷風の日記「断腸亭日乗」一九四八年二月二〇日の項では知人の来翰を「新宿帝都座五階のエロレビューを見た人の話」として引用し、「裸踊の他に西洋名作物語とか申すものあり」として、若干の描写がなされる。（岩波文庫『断腸亭日乗（下）』一九八七年、三二〇頁）。

- (16) 「山下汽船」の創業者山下亀三郎（一八六七—一九四四）が一九四一年に創設した「第一山水中学校」のこと。桐朋学園の前身。転勤の多い陸海軍将校の子弟を教育したことで知られたが（自伝 沈みつ浮きつ）山下汽船秘書部（私家版）、一九四三年、戦後、東京文理科大学が引き取り、桐朋第一中学として再発足した。

- (17) 一九二四年に神田須田町に開業した「須田町食堂」を母体に、一九三四年に設立された（株）聚楽が新宿駅東口の目の前に開業したビル。ビルの竣工も同年。地上五階建て。（聚楽社史編集委員会『聚楽五〇年のあゆみ』（一九七四年、六〇—六二頁））。

- (18) バリの同名劇場（一八八九年創立）にちなんで一九三二年に新宿駅裏に、学生に体操、剣術のほか、喇叭譜などを教育した陸軍戸山学校卒で、浅草オペラの俳優を経て浅草玉木座の支配人となった佐々木千里（一八九一—一九六二）が設立した小劇場。ムーラン・ルージュ新宿座の名称で屋上に赤い風車（仏語でムーラン・ルージュ Moulin Rouge）を飾った。諷刺喜劇・レビュの編成でインテリ層を吸収、伊馬春部・阿木翁助ら軽演劇作家をうみ、明日待子・森繁久弥らを輩出した。太平洋戦争下で作文館と改称、戦後復活したが、一九五〇年に分裂解散（吉川弘文館『国史大辞典』）。

- (19) 「テキ」はステーキの略。のちに学校給食にも登場したくらいにかつては一般的だった焼き鯨肉を牛ステーキに匹敵すると見立てた戦後の庶民の見

栄とユーモアがにじむ言葉。

- (20) 戦後の都市の一風俗だったが、少年たちの背後には元締めと言わべきヤクザのカゲがさしていたことを薫さんの文章はそれとなく示している。「東京都民政局統計表」（大谷進「生きてゐる 上野地下道の実態」悠人社、一九四八年）には生活手段として靴磨きをする戦災孤児は物乞いや露天の手伝いに次いで多い七・三％の数字を挙げている。また『第4回警視庁統計書 昭和二十六年』には保護した浮浪児約二五〇〇人のうちの約三四〇人が靴磨きを生活手段としているとある。

- (21) 靴の底革の補修などのため前の方の半分だけを張ること（『大辞泉』）。小田急線柿生駅近くにある「麻生不動尊」のこと。応永年間（一三九四—一四二八）の開基とされる。火伏せのお不動様として知られ、一月二八日にだるま市が立つて近郷近在の人々が多数集まる。

- (22) 鶴見川（地元では「大川」と呼んだ）については宮野薫さんのエッセイ「鶴見川の思い出」（和光大学地域連携研究センター誌『逕（みち）』第一号（二〇二二年一月））も参照されたい。また、鶴見川にまつわる習俗等に関しては、故・鈴木勤介名誉教授の『私編 岡上風土記稿』（八月書館、二〇〇三年）「第八の章 鶴見川春秋」に詳しい。

- (23) 薫さんが相原の農舎学校に通っていた戦時中、勤労動員で相模原の陸軍造兵廠（現アメリカ軍相模総合補給廠）に行ったことがあるという。そこで出された水団が空きつ腹に美味かったというが、造幣廠内にはプールが有って泳いでみたがうまく泳げず、「鶴見川ではあんなに泳げたのに」と友人に話したら「鶴見川では泳いだのではなく、流されていただけなんだろう」と言われて笑いあったとのことである（二〇二二年一〇月談）。

- (24) この「山林の形態」の章の記述は岡上郷土誌会『郷土岡上』（二〇〇六年五月）の「ひと昔前の里山・岡上の様子、状況、風景」の項（一六七—一六八頁）の記述と重なる部分が多い。同書刊行時の郷土誌会会長だった宮野薫さんが筆を執ったものと思われる。

- (25) 一般的に薪炭材として使われることが多いが、川崎市教委『川崎市民俗文化財緊急調査報告書第一集 岡上の民俗』（一九八二年三月）の「生業と交易」の「炭焼」項（三三頁）に「岡上では三輪（現、町田市）や奈良（現、横浜市）との境の付近に炭焼のための土ガマが作られていた」とあり、そ

の材としてカシ、クヌギの名前を挙げている。ナラなども薪炭材に使われたと考えられる。薫さんの家でも村のカマで炭を焼き、一カマ焼くのに七〇把から八〇把のマキを使ったという。そのマキを伐るには、チェーンソーの無かった時代ゆえ、手ノコを使った。きびしい仕事だった。一カマから四貫目（一五kg）の俵で二〇俵ほどとれた。出来上がった炭は自家用のほか、販売もしたそうである（二〇二一年一月談）。同じ麻生区内の黒川は江戸期から「黒川炭」の産地として知られていた。

(27) 注26に同じ。

(28) 注26に同じ。

(29) 広葉樹のこと。

(30) 『岡上の民俗』の「耕地」の項に「水田は少ないが岡上全域に点在しており、谷戸、川井田地区には多く見られる。水田のなかにはドブツタと呼ばれる湿田がある。（略）川井田地区に多く見られたという。ドブツタと知らずにタオコシに牛を入れ、牛が田から出られなくなったという話もある。」との記述が見られる（二九頁）。

(31) 薫さんが初代会長を務めた柿生禅寺丸柿保存会による『郷柿蒼悠久 柿生に生まれた 川崎の禅寺丸柿（二〇〇五年）』には禅寺丸柿発見の経緯から現在の柿ワイン製造に到るまでの様々なエピソードが、関係の方々の思い出とともにまとめられている。薫さんのエッセイは二本収載されており、なかでも宮野家蔵の「柿山仕切帖」の写真とともに紹介される記録類は貴重である。

(32) 形山浩子「鶴見川流域における川魚と人の関係」（ヒトと動物の関係学会『動物観研究』No.13、二〇〇八年十二月、六五頁）。

(33) 形山注32によれば、鶴見川流域で鯉はほとんど捕獲もせず、食用にもしなかったとのことである（堂）。

上の本文にもあるとおり、鯉はもともとは岡上の鶴見川には見られなかったようだ。岡上郷土誌会『郷土岡上』（二〇〇六年）には「今、鶴見川に鯉がいくらでも見られますが、代わってフナやハヤは見られなくなりました。川岸に「川をきれいに」「川の魚を大事に」と呼びかけた県治水事務所に問い合わせると、意図的に増やそうとして鯉を放ったのではなく、いつのまにか自然に増えたのだそうです。」との記述が見られる。また、かつて

鶴見川沿いに立地していた水車の堰内に飼われていた鯉が大水のときに鶴見川に逃げ出し、その末裔が繁殖し生き残ったのだとも言われる（小）。

(34) 「ギバチ」のこと（形山注32に同じ）。ナマズ目ギギ科ギバチ属。環境省の『レッドデータブック2012』で絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。（『日本魚類館』小学館、二〇一八年）（堂）。

(35) 鶴見川流域では「カマツカ」を指す（形山注32に同じ）。カマツカはコイ科カマツカ属。「河川中・下流域や農業水路などの砂底や砂泥底に生息し、砂中の底生動物を捕食。」（『日本魚類館』）（堂）。

形山（注32）でドジッポは「捕獲後、食べる魚」と分類され、ギンブナは「捕獲し、場所によつては食べる魚」とされているとする（堂）。

「ドジッポは食べて美味しい。ギンブナは名前がいいが美味くない」とのこと。薫さんが「ドジッポ」の名の由来を友人に訊いたら「川底でロノロシていて獲りやすく、ドジな魚だからではないか」と聞かされたことがあるそうである（二〇二一年一月談）（小）。

(36) 「タナゴ」のこと（形山注32）とあるが、日本在来のタナゴ亜科としては、タナゴ、ゼニタナゴなどがあり、流域自然研究会「鶴見川流域おさかな図鑑」（二〇〇五）によれば、鶴見川流域ではうち四種の在来種が生息していたとしている。ここでいう「タナゴ」がどの種であるかは不明。現在の鶴見川では移入種のタイリクバラタナゴのみが見られる。ただし鶴見川流域の金井地区ではミヤコタナゴを「キンブナ」と呼ぶ例が形山論文に示されている（堂）。

(37) 岡上地域ではオイカワをこう呼んでいたという考察を形山（二〇〇九）で載せている。形山浩子「鶴見川流域の川魚と人の関係についての環境文化論的研究」（和光大学大学院修士論文、二〇〇九年）（堂）。

(38) スナヤツメのこと（形山注32に同じ）（堂）。

(39) 『郷土岡上』一六九頁上段に同様の記述がある。薫さんを授業のゲストにお招きした際にも、ドジョウ打ちの体験談を聞かせて頂いた。町田市文化財保護審議会編『町田の伝承 こどもの遊び』（二〇〇〇年三月、一〇頁に「どじょう打ち（火ぶり）」の項があり、「夜間、串状の棒（菌フラス）の形、長さ四十センチメートルくらいで眠っているどじょうを刺して取る。」との記述とともに「串状の棒」が図示されている。『日本国語大辞典 第二版』

は「どじょううち（泥鰌打）」を立項し、『風俗画報』の画を併載している。小川芋銭の没後画集『芋銭子画冊』（芸神堂、一九四一年）には、広々とした山野の夕景にたなびく八本の（カンテラの）煙の下に横一列に並んで泥鰌を捕る人影を画く「泥鰌取り」が収載されている。

- (40) 環境省「レッドデータブック2014」で絶滅危惧ⅠBに分類されるホトケドジョウのこと（堂）。

- (41) 「シュラン」のこと。ホクロ、ジジババなどの呼び名で親しまれた山草だが、江戸時代の初期には栽培されていたという（堂）。

- (42) 近年でも岡上でただ一人の木工さんである鳥海輝治さんのお宅を約束なしに訪れた際、菓子盆に山盛りのお菓子をお茶受けに出していただき、恐縮したことがある。来客を想定した農村の文化の興行き、近隣の人々への交際の原基がここにあると言えそうである。

- (43) タイトルの直後に「宮野薫 八八歳／平成三〇年二月記」と記されている。

- (44) 岡上橋は『都・県道一三九号真光寺・長津田線』の「岡上跨線橋」のほぼ真下に架かる「宝殿橋」のすぐ下流の橋。『郷土岡上』（二〇〇六年）には「昔『本橋』と言っていた『岡上橋』は、昭和三十五年には改修されてコンクリートの橋となった。その後昭和五十八年に河川改修となり、現在の岡上橋となった。」とある（三〇頁）。薫さんの記述では続けて「学校の方を振り向く」とあるが、六年生の薫さんは岡上の分校ではなく柿生の本校に通っていたから、柿生方向を見たことになる。岡上分校から下流側に四〇五〇ほど離れた「一本橋」あたりも薫さんの通学路だった。

- (45) 小島一也（一九二七—二〇一四）元川崎市議会議長、郷土史家。著書に『麻生郷土歴史年表』（二〇〇九年）、『麻生の歴史を探る』（二〇一六年）など。

- (46) 浜松市の北東にある秋葉山は修験の山としても知られ、火伏せの神を祀るとされる。ちなみに岡上は修験に所縁の地でもあって「山伏谷戸」の名が残り、梶家、高松家はその家系だとされている。高松家には京都醍醐寺からの認証状などのほか山伏の用具が残っていたが、醍醐寺に返却されたほか、川崎市民ミュージアムに一部が収められている。高松家の脇には山伏修行（山林抖擻）のために歩いた細道が、短い距離だが、残されていた。柿生郷土史料館館報「柿生文化」の三二号（二〇一一年一月）に「角間田ギツネ——麻生区上麻生」の記事があり、角間田、三輪、白根耕地など麻

生区内でギツネ火が見られたとの記述がある。続く三三号（二〇一一年二月）にも「ギツネの迷い道」という記事が掲載されている（いずれも無署名）。行政区画などはギツネさまには無関係な「線」に過ぎず、隣接する町田市の文化財保護審議会編の『町田の民話と伝承 第二集』（一九九八年三月）六八―七八頁には「山崎の狐火」や「狐の提灯」を含め、ギツネに化かされた話が一八編収録されている。

- (48) 「フアフロツキーズ現象」と呼ばれる現象かも知れない。『Kafu's life is full from the stage』からの造語「小魚やカエルなどの異物が、空から大量に降る現象。」と小学館『大辞泉』にある。集英社『イミダス2009』では(1)「竜巻説」、(2)「鳥説」、(3)「イタズラ説」を挙げるが、説明がつかないケースもあって未解明としている。

- (49) 貝原益軒『天和本草』（宝永五（一七〇八）年）巻十一「木之中」「白桐」の項に「女子ノ初生三桐ノ子ヲウフレハ嫁スル時其装具ノ櫃材トナル」とあるが、『日本国語大辞典 第二版』の「嫁入簞笥」の項には徳富蘆花『思出の記』（一九〇〇—〇二）の「今時の世に桐の木から育てて嫁入簞笥作るものがあらうや」との用例が記されている。かつては薫さんの記すとおりの風習があったが、一九〇〇年頃にはすでに廃れていたことがうかがえる。郷里・上州桐生の我が家の裏庭には桐の木が一本あったが、それは姉の嫁入りの時に切って使うのだと亡き父（一九〇六年生）から聞かされた記憶がある。

- (50) 天明の大飢饉は一七八二年から一七八八年まで間歇的に深刻化し、一七八三（天明三）年癸卯が大飢饉の年とされる。

- (51) 『故事俗信ことわざ大辞典』には「卯の日に糯苗を植える人が死に、その葬式餅になる」。また『日本国語大辞典 第二版』の「卯日重」の項には「卯の日は吉事にはますますよく、凶事にはますます悪いことが重なるという俗信。」との記述がある。

- (52) 小学館『日本方言大辞典』（一九八九年）に「やな刈り」の項があり、「田畑の縁の斜面や土手などの草を刈ること」とある。同項には「あな刈り」として、丸山久子『遠藤民俗聞書』（一九六一）を出典とする神奈川県藤沢市での用例も挙げる。『遠藤民俗聞書』を見ると「あなあげ」項には「あなは畑の端の方の傾斜面。ここを削り上げることあなあげ、ここ草を刈る

ことをあな狩りという」とあり(同書、一二五頁)、「やな」の項には「あなと同じ。畑の端の斜面」との記述も見られる(同書、一二八頁)。「あな」の方が親項目の扱いである。また、町田市文化財保護審議会編『町田の伝承 町田の方言と俗信・俗謡』(町田市教育委員、二〇〇四年)の「農業」の項には「あながり」が立項され「穴刈り 山際の畑の所有者が、木の根を防ぐために掘った溝を穴といい、そのまわりの草刈り」との語釈が示されている(三七頁)。

(53) 『岡上の民俗』の「道普請」の項に「必ず一戸一人ずつ出て(略)講中ごとに材料の砂利や材木の配布を受けた。(略)道普請は全戸がとにかく一堂に会する時であり、村の道路を村民が力を合わせて維持して行こうということで精神的なつながりの強化される時」との記述がある(一六頁)。

(54) 『郷土岡上』の「道ぶしん」の項には「昭和三十年代いっぱいまで、各地区では講中、住民が出て春秋の彼岸に『道ぶしん』をしていました。(略)道路が整備舗装されてからは行われていません。住民の共同作業、ふれあい奉仕の一つが消えました」とある。舗装された道路の便利さの影で失われたものがあつたことが記録されている。道普請に使う砂利は鶴見川から取った(上掲『岡上のあれこれ』「河川」の項を参照されたい)。

(55) 消防署があるという常識は意外に新しい。川崎に消防署が生まれたのは消防本部が出来た一九四八年三月。それ以前にあつたと思われがちな「消防団」も一九四七年一〇月に公布された「消防団令」に基づいて設立された。それ以前、岡上では村内に「自治消防」があり、全戸から一人ずつ一七歳から五〇歳くらいまでの男子の参加が義務だった。地元の人たちが火消しを担当したが、昭和三〇年代からは勤めに出る人の増加などが原因で「正消防(自治体の消防)」に委ねられるようになった。詳しくは、鈴木勲介『私編 岡上風土記稿』一二一〜一二三頁に引用された義胤小学校編『柿生村／岡上村 郷土誌』(一九三三年)の記述を参照されたい。『郷土誌』は一九六九年に柿生小学校がタイプ印刷で再版しており、同書二二〜二四頁の記述が鈴木著に抄出されている。また、『岡上の民俗』一六〜一七頁を参照されたい。

(56) 大阪朝日新聞社が一九三八(昭和一三)年四月一日から五月三〇日まで西宮球場と球場外で「支那事変聖戦博覧会」を開催した記録類は見つかる(例

えば土屋礼子編『日本メディア史年表』(吉川弘文館、二〇一八年、一三六頁)が、東京での記録が見つからない。今後さらに調べる予定。

(57) 現在の麻生区民館岡上分館の場所にあつた柿生小学校岡上分校のこと。高等柿生小学校に由来し、その後、柿生村出身の富豪・白井義胤の名を冠した義胤小学校「のち義胤尋常高等小学校」となつて岡上のほか、三つの分校を有した。薫さんが通学した頃は、「義胤尋常高等小学校」であつた(『郷土岡上』五三頁)。薫さんは「昭和十六年度」の卒業で、校名は薫さんの卒業一年前の一九四一年三月、戦時体制に即応して「柿生国民学校」になつていた(柿生の教育のあゆみ刊行会「柿生の教育のあゆみ」一九八〇年八月、三九二頁)。

(58) 横浜線の相原にあつた神奈川県立農蚕学校のこと。現在の県立相原高校の前身。

(59) 川崎市役所旧本庁舎(二〇二二年一月現在、改築中)は一九三八(昭和一二)年に建てられ、高さ約三六mで八階建てに相当する背高な時計塔がランドマークであつた。戦時中は迷彩色を施され、空襲監視塔として利用された(市役所HP <https://www.city.kawasaki.jp/kawasaki/cnsfiles/content/0000025/2584/1-12.pdf>)。二〇二一年一〇月二二日閲覧。／写真参照。

(60) 前出の島海輝治さん(一九三三年生)に伺ったところ、島海宅にも兵士が宿泊したことはあつたが、一泊だけだったとのことである(二〇二一年一月談)。

(61) まぼろしとなった米軍の相模湾上陸作戦(通称「コネット作戦」)については大西比呂志・栗田尚弥・小風秀雅『相模湾上陸作戦』(有隣新書、一九九五年)に詳しい。

(62) 相模湾から米軍が上陸してきた場合、戦車を地面に埋めて砲台として戦う作戦が立てられ、そのため柿生国民学校に大隊本部を置いて掘削要員の兵隊が分教場などに分宿した(『ふるさととは語る——柿生・岡上のあゆみ』(柿生郷土誌刊行会、一九八九年、八四頁)とあつて、宮野家への宿泊もそれと関連があつたかも知れない。

(63) この昭和二〇年五月二五日の空襲では横浜、川崎、高座方面へ一〇〇機のB29が来襲した。その際の岡上空襲について薫さんは柿生郷土誌刊行会『ふるさととは語る——柿生・岡上のあゆみ』(一九八九年一〇月)に八五頁

から八七頁にわたる（二段組み）詳細な体験談を寄稿している。
〔64〕「エレクトロン焼夷弾」の名称は薫さんに教えて頂いた。エレクトロンはマグネシウムを主体としアルミや亜鉛などを混ぜて強度を上げた合金の商品名。

〔65〕和光大学の通学バスが発着する「赤荻酒店」のすぐそばに掛かる橋。「郷土岡上」には「大正橋 コンクリート架橋になったのは昭和三十二（一九五七）年その前は、幅約2mの板橋で、大正年間に車（リヤカー、手車）が通行できるようになった。それ以前は丸太を並べたぶらぶら橋（一本橋とも）で、森水車に搗き物に行くのが大変だったと聞く。」とある（二二頁）。文中「森水車」は鶴見川左岸・東京側にあった水車。もう一つ、川崎側に「梶水車」があった。いずれも穀物を搗いたり、糸繰り等のために用いられた（川崎市博物館資料調査団「川崎の水車 昭和62年度博物館資料調査」一九八八年、一四四頁～一四八頁）。

〔66〕薫さんのお宅にはその時の焼夷弾の燃えカス（エレクトロン合金）が保存されている。大人の掌サイズですつしりと重く、この筐体が身体を直撃したら命に関わるだろう（写真参照）。

〔67〕一九四五年五月の岡上周辺に対するB29爆撃機の大襲撃（焼夷弾攻撃）については、『戦中戦後の岡上を語り継ぐ』！ 記録集（古文書に親しんで、郷土岡上を語る会／麻生市民館岡上分館発行、二〇一〇年二月）に多数の証言が残されている。

〔68〕一例を挙げれば、当日朝に「朝日新聞」は「特報」を発し、「けふ正午に重大放送」の見出しを掲げて「十五日正午重大放送が行はれる、この放送は真に未曾有の重大放送であり一億国民は厳肅に必ず聴取せねばならない」との告知を行っている。

〔69〕気象庁のHPには一九五〇年七月一六日～九月三日。五一年一月四日～六月二八日と長期にわたって三原山の噴火が続き、五一年六月の噴火では噴煙が上空五千米メートルに達したと記録されている（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/fkyo/317/Jzu-Oshima/317_history.html）二〇一一年一〇月二二日閲覧）。

〔70〕日本語の概説では以下に詳しい。馬淵浩司、瀬能宏、武島弘彦、中井克樹、西田睦（二〇一〇年）「琵琶湖におけるコイの日本在来 mtDNAハプロタイ

補記 本稿の校正進行中に薫さんと電話でお話しする機会があり、

薫さんも寄稿しておられる『柿ふる里』（ふる里を語る柿岡塾編、夢工房発行、二〇二三年一月、二二六頁）が刊行されたことを教えて頂いた。柿生や岡上の暮らしや民俗文化などに関する多くの回想を収めるほか、「昭和三十年代の地図」や各地区の「屋号」紹介なども収載され、柿生と岡上に関する「よめる地域文化小百科」と言うべき書冊となっている。本稿の注釈に加えたいと思う事柄が幾つも見られるが、今は省略に従う。薫さんは禅寺丸柿、鶴見川をめぐる二本のエッセイを寄せておられる。